

大学教育と地域資源開発

—福知山公立大学でのPBL教育事例を通じて—

University Education and Development of Regional Resources: Through A Case of Project-based Learning in The University of Fukuchiyama

平野真

Makoto Hirano

要旨

福知山公立大学で行われたいわゆる「実践教育」(PBL=project-based learningによる地域協働型教育)の事例を通じて、大学教育により地域資源開発を行う手法とその課題について考察する。ここでいう地域資源とは、学生と地域住民あるいは地域の若年世代との協働を通じて発掘・開拓される有形・無形の資産としての観光資源であり、ソーシャル・キャピタル(社会資本)としての要素も持つものである。具体的な事例としては、地域の小・中学生と大学生が地元の伝統工芸である和紙を使って灯籠を作り、地元の自然林である竹林の周辺で地域住民等と開催したイベント「竹林と光のプロムナード祭」に向けた教育実践事例をとりあげる。事例の分析から得られた示唆として、学生が取り組む地域課題は、地域コミュニティの様々な担い手が緩い紐帯を結びながら関わられるような複合的なものとして設定することが、活動の幅を広め地域社会への影響を強めるうえで効果的である。

キーワード: 地域資源、無形資産、ソーシャルキャピタル、PBL

Keywords: regional resources, intangible asset, social capital, PBL(project-based learning)

1. はじめに

日本の高等教育における PBL (project-based learning) の重要性については、各所で議論されてきた。周知のごとく、PBL はもともと米国の哲学者 Dewey (1915) のプラグマティズムに基づいた経験主義的教育論⁽¹⁹⁻²¹⁾に端を發し、日本では、大正デモクラシーでの羽仁もと子の自由学園、赤井米吉の明星学園などに代表される私学自由教育運動⁽⁶⁾⁽²³⁾によって導入された。昭和に入ってから戦後にかけて、無着成恭 (1951)・国分一太郎 (1954) などによって生活綴り方運動⁽⁹⁾⁽¹³⁾⁽¹⁸⁻¹⁹⁾が展開され、自由作文を通じて生徒を取り巻く現実社会に自律的に目を向けさせる教育手法が生まれた。その後、理科教育において、実験を通じた仮説検証型の主体的な思考の組み立てに着目した板倉聖宣 (1974) の教育手法⁽³⁻⁴⁾が提案され、国文学の熊谷孝(1967)と心理学者乾孝 (1983) は文学作品鑑賞において感情移入を通じた学生の内発的な自我の成長に着目した教育理論⁽²⁾⁽⁷⁻⁸⁾⁽¹³⁻¹⁴⁾を提案した。近年では高校教育や大学教育の重要な方法論として、PBL を包含するより包括的な概念としての AL (active learning) が重視されるようになり、その具体的な手法の積み重ねが続けられている。

福知山公立大学は、2016 年に地域貢献を大きなミッションとして掲げ、地域の現場 (フィールド) に学生と教員が直接出向き、地域住民との交流を通じて地域の課題を学び、その課題解決に向かって PDCA サイクル (plan-do-check-act cycle) を行う地域協働型 PBL いわゆる「実践教育」を大学教育の中心に据えた活動を行ってきている。本稿では、その福知山公立大学での実践教育の事例を通じて、大学における PBL の具体的な実現方法や課題について、大学の地域貢献という課題との関係も含め議論する。

2. 先行研究レビュー

溝上(2016)によれば、いわゆる PBL には問題解決型学習(problem-based learning)とプロジェクト学習(project-based learning)の2つがあり、ともに AL (active learning)の一つとして位置付けられるという⁽¹⁷⁾。このうち、問題解決型学習は、1960 年代後半の医療系大学で始まったもので、学生が現実の医療問題に取り組み学習知識を駆使しながらこれを解決していくものとして考えられたという。一方、プロジェクト学習は、Dewey の教育思想に端を發し、20 世紀初頭の初等教育から次第に高等教育へと広がっていったものとのことである。これは解決すべき問題をプロジェクトのテーマとして捉え、仮説検証に向かうもので、学生版の研究活動だと言われることもあるという。溝上(2016)は、プロジェクト学習とは、「実世界に関する解決すべき複雑な問題や問い、仮説を、プロジェクトとして解決・検証していく学習のことである。」と定義している⁽¹⁹⁾。

PBL 教育の方法論は、工学教育 (高橋ほか (2002) ⁽¹⁸⁾)、IT 教育 (澤口 (2012) ⁽¹⁷⁾ほか) など幅広い分野で議論されており⁽¹⁾⁽⁵⁾、どちらかといえば社会科学系よりはむしろ理工学系教育におけるほうが、教育効果が定量的に確認しやすく、教育方法論に関する研究事例も数多くある。駒谷 (2009) によれば、IT 分野の人材育成に関しては、日本経済団体連合会も 2005 年に「産官学連携による高度な情報通信人材の育成強化にむけて」の中で IT 人材育成に PBL 教育が必要なことを述べており、こ

の提言が文部科学省や大学にも影響を与えたということである⁽¹⁶⁾。

理工系教育に比べ、社会科学系教育の分野では、教育効果を定量的に議論しづらい面があり、教育方法の効果の検証が理工系ほど明快ではないという側面もある。しかしだからこそ、社会科学系教育においても、PBL 教育のディテールについて、学生の内発的成長と実社会の課題解決との相関にどのように取り組むのかなど、具体的な議論を活発化し、現場の教育実践を前進させていく必要がある。というのも、テーマの設定から、仮説を立て、仮説検証方法を立案したのち、実際に検証を行い、考察へと進む一連の過程は、まさに普遍的な学術研究の過程と同様の過程であり、また企業活動における PDCA サイクルとも基本的には類似の過程であると考えられる。従って、これを教育過程として組み立てるということは、優れた問題発見・解決実践能力を有する主体的行動人の育成に寄与するだけでなく、学問・教育・実社会をつなぐ方法論の緊密なリンケージの形成へも寄与するものとなる。

具体的な教育の組み立てについては、取り扱う課題の特質や教育の対象となる学生の属人的な特質など様々な個別事象にも対応する必要がある、こうした教育の前進のためには、詳細な事例の積み重ねとその中から導かれる示唆やヒントの抽出が極めて重要である。

大学における社会科学教育における PBL の実践報告については各所で行われており、また必ずしも学術誌への論文掲載という形をとらず、大学の教育研究報告や大学案内などの中でも様々な形で実践例の報告がある。例えば、文部科学省が著者として出版している「大学教育の質的転換に向けた実践ガイドブック」⁽³²⁾には、国公立・私立大学など 42 の大学・短期大学での教育実践例が紹介されており、その中で以下のような大学で PBL に相当する大学教育を行っている。

京都産業大学：企業と連携したオン・オフ・キャンパス・フュージョン PBL 教育を実施

公立はこだて未来大学：企業・地域社会と連携してプロジェクト学習を行う

立教大学：企業から課題をもらい PBL 教育を実施

京都産業大学：企業と連携したオン・オフ・キャンパス・フュージョン PBL 教育を実施

松本大学：地域づくり考房「ゆめ」を通して、学生が地域事業に参加する教育を実施

日本福祉大学：地域の NPO 活動に学生が参加し、社会貢献活動を行う

また北九州私立大学では、『自ら学ぶ大学』(吸収の秘密：地域課題にホンキで取り組む 4 年間)⁽¹²⁾の中で、地域創生学群地域マネジメントコースの教育として、「猪倉農業関連プロジェクト (農業の 6 次化の実践実習)」「合馬まちづくりプロジェクト (合馬のたけのこの販売協力)」「小倉商店街プロジェクト (商店街のにぎわいづくり)」「門司商店街活性化プロジェクト (商店街の空き店舗を改装し、学生が商品開発や販売を展開)」など様々な地域密着型の PBL 教育を報告している。農業 6 次化、特産物の開発と販売、商店街の活性化などは、どの地域にも共通の喫緊の課題であり、こうしたテーマを PBL 教育のテーマとして設定している大学は多い。

2016 年 11 月 12 日に東京で開催された日本経済新聞社主催の「地方創生に果たす大学の役割」シンポジウムでも、関東学院大学では、空き家再生プロジェクト、マルシェ、商店街活性化などの活動、大正大学では、都会の学生を宮城県三陸町、山形県長井市、山形県最上町、新潟県佐渡市、新潟県柏

崎市、徳島県阿南市、宮崎県延岡市などに送り込み、各地での課題に取り組む活動、東京農業大学の棚田を守る活動、東日本被災地を支援する活動等々、様々な大学の教育活動が報告された。

今日、こうした大学の社会科学教育における PBL 教育や特に地域協働型 PBL 教育は、各地域の具体的な課題を取り上げ、地域社会とともにその解決に向かうことで、実社会に与える影響力も次第に大きなものとなってきているため、地域社会側も地域課題の解決に大学の力を期待する風潮も出てきている。だが一方、こうした教育を通して、大学生自身の内発的成長がどのように遂げられていくのか、という教育学的検証や、その検証に基づく教育手法・教育過程の改良についても、今後議論を活性化させていく必要がある。そのためには、こうした地域協働型 PBL 教育のディテールについて記録を残し、学生の内発的成長と実社会の課題解決との相関に留意しつつ詳細に分析し議論を積み重ねていくことが必要である。本稿では、福知山公立大学で行った地域協働型 PBL 教育のディテールの組み立てについて、一つの事例について、教育プランの設計・実装・実施結果分析を詳細に記述し、教育としての効果検証などを含めて議論を行い、他所での地域問題に絡めた PBL 教育組み立てに資することを図りたい。

3. 本研究の枠組み

福知山公立大学の「実践教育」＝地域協働型 PBL 教育は、地域社会と密接な関係にある地方の公立大学が、地域社会への大学の具体的な貢献活動の一つとして行うという側面と、大学生の社会科学教育の一環であり、特に実社会において主体的に行動できる人材の育成を図るという側面を併せ持つことから、以下の2つの視点により分析・評価されることとなる。

- 1) フィールドでの地域課題の解決に向けた前進という現実社会での実務的位置付け
- 2) 学生の内発性に基づく成長プロセスとしての人材育成教育としての組み立て

Dewey (2004) の言葉によれば、「何よりも先ず、教育者は、価値ある経験の形成に寄与するにちがいないすべてのものが引き出せるようにと存在している環境-自然的、社会的な-をどのように利用すべきであるか、そのことを知らなければならない」ということであり、地域課題をどのように学生の教育として取り入れるか、教育的な効果への配慮なしに課題を学生に突きつけてはいけないと考える⁽²⁴⁾。したがって、地域課題をどのように学生の教育プログラムの中に組み込むかは、それなりの周到な計算がなされてしかるべきである。

福知山公立大学での実践の場合、これら2つの視点から「実践教育」を組み立てるということは、より具体的には、以下のようなステップにより教育のフレームを組み立てることになると考える。

- a) 福知山市の地域課題の俯瞰的分析
- b) 地域課題の「大学生の身の丈にあった教育テーマ」としての切り取り
- c) 教育テーマを用いた学生の内発的成長プロセスの時系列的設計と実装
- d) 教育実践を通じた学生の「気づき（内発的成長）」についての検証
- e) 結果として生まれた地域へのインパクトの分析

- f) 上記実践による教育テーマ設定の妥当性に関する検証と示唆
- g) 今後の検討課題の抽出

図1に、これらのステップのフローを模式的に示す。本報告では、前記各ステップに沿って、2016年度に実際に筆者が行った教育の内容をまとめ、結果を分析・考察する。

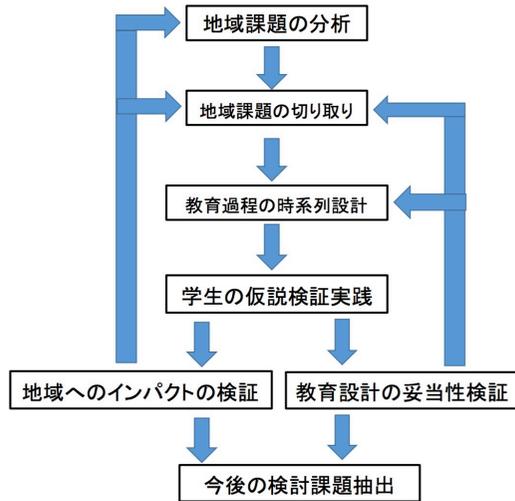


図1. 教育過程設計のフロー模式図

4. 教育実践とその分析

4. 1. 福知山市の地域課題の分析

ここでは福知山市の持つ様々な地域課題の概要を俯瞰的に把握し、今回の大学生の教育テーマとしてどの辺に照準を当てるか、予備的に行った検討について述べる。

福知山市⁽³¹⁾は地理的には京都府北部ないし三丹地域と呼ばれる京都市の周辺地域の中ほどに位置する人口8万人弱の地域で、その地政学的な特質から歴史的には京都や大阪の経済都市圏に近い流通の要（ハブ）として商業的な町として栄えたという。明智光秀の城下町として構成された市街地を中心に、山間部に広がるエリアで構成されるが、市街地にあるかつての城下町商店街は、日本の多くの地域と同様、大手企業の大型店舗の進出に会い疲弊し、いわゆる「シャッター商店街」と化している。

一方、福知山市の恵まれた点として、1960年代に日本の各所で始まった工業団地形成でいち早く成果を上げた「長田野工業団地」（大手製造業企業の工場などを含む約40社ほどの工業団地）⁽⁴⁰⁾が郊外に位置している。工業団地は、人口面でも従業員の8割に及ぶ約5000人が福知山市に居住し、税収面でも市の重要な安定的財源となっている。福知山市においても、日本の多くの地域と同様、人口

減少がみられるが、平成7年から平成27年への20年間で、その減少率は5%以下であり、比較的減少率が少ないのは、こうした工業団地の存在なども作用しているのかもしれない⁽¹⁰⁾。福知山市の市民税のうちの法人税の割合は、平成27年度のデータでは、約28%を占め、13億円強である。これは市税全体のなかでも12%ほどになり、このほかに固定資産税も考え合わせれば、間接的に工業団地の影響が強いことをうかがわせる。近隣の舞鶴市や宮津市と比べても、人口比率を勘案したとしても倍位以上の法人税収入がある。

福知山市の歴史的な資産に関しては、元伊勢神社とか大原神社といった貴重な文化遺産があるほか、大江地方の鬼伝説とか、民俗学的な観光資源にも恵まれていると言える。しかしにもかかわらず、宮津、城崎、舞鶴、篠山などといった周辺地域に比べて観光客や観光消費額は少ない。周辺地域が年間200万人以上の観光客がある中で、福知山市は平成22年には約120万人だった観光客が、平成26年には80万人を切っており、減少傾向が強い。この福知山市の観光不振の背景には、福知山線の大事故、由良川の洪水、花火大会での爆発事故といった不幸な事件によってある種の負の地域イメージ(風評)が形成されているのではないかと気にする地元の人々もいる。持っている観光資源を有効に活用すれば、周辺地域と同等ないしそれ以上の観光客を獲得し、観光産業を前進させる潜在的な力は、福知山市にも十分あると考えられる。現時点での問題は、観光資源の演出の仕方などむしろそうした潜在力を生かしきれない点であろう。

公的なデータとして、市が平成28年に発行している「未来創造福知山」⁽³²⁾には、市民や高校生への郷土に対するアンケート調査の結果が載っている。それによると、町の人々が考える最も大きな課題は地域の産業振興と雇用確保であり、また重要性の認識としては安心・安全や子育て、福祉といったテーマがあげられている。また、重要度の認識はやや少ないが、市民の生涯学習や文化的活動について、市民の満足度は低い。市民の8割近くが、福知山を住みよい町だと考えているが、一方高校生で福知山に定住する気持ちがあるのは3割強である。この背景には、やはり産業の発展と雇用の確保に対する不安があるものと推測される。

以上をまとめると、福知山市においても、地域の課題として、他の多くの地域と同様にまず産業の活性化と雇用確保という課題があり、これが解決しないと人口減少を加速させる可能性がある⁽³¹⁾。産業の活性化の課題の中には、商店街の活性化の問題も含まれ、また中山間地域の農業などの活性化、さらには地場の伝統工芸や手工業、特産物製造業の活性化などの問題も含まれる。その中で、今後10年20年さきの地域をどのような産業が支えていくか、という将来を見据えた産業設計が重要であることはいうまでもない。工業団地の存在は、通常地域よりも税収の安定化や雇用確保の面で有利であるとも言えるが、観光の停滞ということから考えると、観光に絡んだ飲食業やホテル業、サービス業、小売などの関連産業については、活性化の余地が残っていると考えられる。ちなみに、福知山市に比べ人口は約四分の一の宮津市は、観光消費額では福知山市の3倍以上を稼ぎだしている。観光の問題は、単なる産業振興問題というより、いわゆる町づくりと大きく関係しており、観光客だけでなく住民自体が魅力や心地よさを感じられる町の景観やソフトの充実が必要であり、その意味ではそ

うした町づくりを支えるソーシャル・キャピタルとしての地域の連携力や協働の積み重ねも重要でもあるだろう。優れた歴史遺産や民俗文化も持つ地域であるため、余計にそうした資産を生かしきれていないところに、マーケティングやソーシャル・キャピタルとしての課題も残されている可能性がある。

4. 2. 地域課題の「大学生の身の丈にあった教育テーマ」としての切り取り

地域のさまざまな課題のうち、ここで考えねばならないのは、大学生が1年間（ないし4年間）の教育プログラムで扱ってそれなりの成果を生み出し、PDCA サイクルの中で自己の行動を検証していくのに適した「大きさ」という点である。様々な地域課題を丸ごとテーマにしてしまうと、大学生には難しすぎる課題となってしまう。

例えば、大学生の日常生活に比較的身近な「町づくり」といった課題を考えるにしても、「町づくり」そのものではあまりに大きなテーマであり、大学生にとってはどこからどのように手をつけていかわからないものになってしまう可能性がある。そこで、本研究では、教育のテーマを、大学生の「身の丈」にあった（1年間の教育プログラムの中で十分達成できうるような一次目標を持つ）ものとしていかに構成すべきか策を練った。

きっかけは、地元の環境会議と呼ばれる環境保護団体の活動である。同団体では、由良川のほとりにある蛇ヶ端藪（通称明智藪）という竹林の保護・保全を計画していたが、経費も労力もかかるため、単なる保全ではなく、嵐山の竹林のような観光資源にもならないかと思案していた。そこで、著者は、この竹林の保全と観光資源としての発掘を結びつける活動として、地元の伝統和紙を用いた灯籠づくりとその灯籠による竹林にまつわるイベントとして「竹林と光のプロムナード祭」なるイベントを企画し、これに関わることで学生と地域社会との関わりを誘導しようという企画を立てた。そしてイベント実行までのプロセスにおいて、学生がいかに主体的に取り組めるように工夫するかが、教育上のポイントであると認識した。無論、学生たちが自分たちで地域の課題を現場で調査し、1年間で扱う課題を自ら切り出すことができれば、その方が望ましい。しかし今回のプログラムでは、学生の気づきを設計する上で、別のプロセスに注力する方が効果的であると判断し、あえて課題の切り取りについては教員サイドで準備した。

テーマ立案で特に留意したのは、学生自身が、地域の課題のひとつである観光客が少ないといった現象を、結果を表面的に見るだけの姿勢から、原因を考え、観光におけるイノベーション誘発が「どのようにして起こされるか、起こしていけるか」への気づきを触発され、主体的な思考で自分なりに何をしたらいいか考えていく大雑把な筋道を先回りして用意しておくことである。そのためには、どんな対象をどのような点に留意しながら観察させるか、思考のプロセスのポイントは何か、など入念な事前設計図を描くことが必要である。

具体的には、学生に、

- 1) 個性的な魅力ある町とは何か？（いまの福知山市には何が足りないのか？）

- 2) どのようにしたら、それは実現されるのか？（福知山市がしなければならないことは何か？）
- 3) 自分たちの身の回りにある対象の中で、それはどう具現化されるのか？（具体的な取り組みとは？）
- 4) そのために何をすればいいのか、どのような行動をおこせばいいのか？（学生自身は何ができるのか？）

といった思考のプロセスを、極力内発性に突き動かされる形で踏ませることを考えた。

和紙の灯籠をつくり竹林を飾るイベントというテーマを選択したのは、次節で述べるような一連の教育過程の中で、それなりに学生が自分なりのテーマを見出し、仮説検証すること、1年間でプロジェクトとしての区切りをつけやすくする、などの点を考慮した時、この程度の内容と仕事量であれば、適切に学生を指導していけるものと確信したからである。

4. 3. 教育テーマを用いた学生の内発的成長プロセスの時系列的設計と実装

当初、4月に4年生のゼミに配属されたばかりの学生たちは、まだいわゆる実践教育を受けた経験もなく、1年間のゼミナール活動で、何を学ぶのかも、明確なイメージを持ってないでいた。また、特に地域社会への貢献や地域の人々との協働について深く考えたこともなく、この教育のもつ目的や具体的な手法についても理解しているとはいえない状況であった。

そこで、前節の1)～4)に相当するプロセスとして、以下に示されるような教育のプロセスを設計し、実装していくこととした。

- 1) 個性的な魅力ある町と思われるものを観察し、町の魅力づくりについて分析する
- 2) 福知山市における魅力の発掘を行う
- 3) 魅力づくりを、自分たちの出来る範囲でどう具現化するか考える
- 4) アクションプランを練り、実際に行動する
- 5) 結果を反省し、経験を通じて得られたものを整理し、次の課題を抽出する

これを時系列的なフローとして模式的に図2に示す。

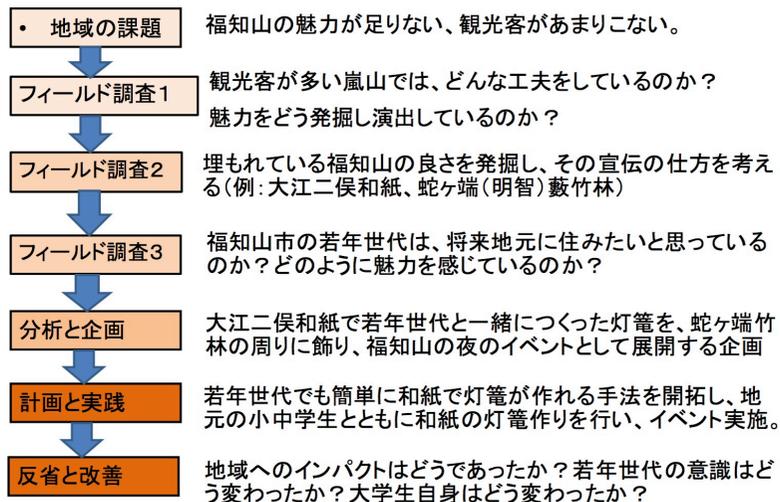


図2. 教育プログラムの時系列実施フロー

以下、各プロセスの具体的な内容と、実践経過についてまとめる。

a) 京都嵐山の調査

福知山への観光客が少ない本当の理由は何か、それは逆に観光客が多い地域の見学と分析によって、ヒントをつかむことができる。そこで、福知山から電車で行ける範囲内で、観光のベンチマークとなるような場所を探した。今回は、竹林のアピールということで、竹林の観光で有名な京都の嵐山がその候補地としてあげられた。

2013年に京都市産業観光局から出された「京都観光総合調査」によれば、同年の京都市への観光客約5000万人のうち38%の人々が嵐山に立ち寄っているという。「嵐山の竹林」と言えば、歴史も古く知名度も高い。そこでまず、実際に学生たちを連れて嵐山を訪問し、観光地としての工夫を発見することとした。

ここで、学生自身の「気づき」を誘発し内発性を高めるために、観光地として成功するための工夫は、一般の小売業や製造業などあらゆるビジネスにおいても人を惹きつけ購買行動に向かわせるポイントと共通していること、嵐山の工夫を分析することで、今後様々な企業に就職し活躍していく上でも、ビジネスの基本を理解するうえで役にたつことを学生たちに伝え、分析の動機付けを高めた。当日は、学生たちに調査結果の記入用紙を配布し、観光地としての嵐山の工夫を発見し、一人10件以上メモするように指示した。その結果、以下のような「気づき」を得ることができた。

*嵐山での気づき（学生のメモから一部掲載）

1. 駅で中国語対応の案内人がある
2. 日本語、英語、中国語、韓国語のガイドパネルがある
3. 駅の窓も和風のデザインで、古都としての京都の雰囲気を出している
4. ゴミ箱が竹で作られていた（デザインがカッコよかった）
5. 竹林の中は、竹で統一されていた（柵や看板、電柱、電線のカバーも竹っぽい感じにしていた）
6. 竹林の中に写真を撮る場所が作ってあった（他の観光客が写真に入らないように工夫）
7. 道路や広場にゴミが全く落ちていない
8. 観光スポットを効率的に回ることでできる人力車を用意
9. 照明にもこだわり、京町屋を思わせる灯籠、レトロ感があり思わず立ち止まる
10. 町内の小物ひとつひとつに嵐山の春夏秋冬の見どころを思わせる装飾が施されている

普通であれば、自分も一人の観光客として受動的に漫然と観光地を見てしまうところを、観光地を演出する側の視点からものを見ることで、まず学生に「人を惹きつけるための努力」に気づいて欲しいというのが、この調査のねらいであり、上記結果からある程度それは果たせたと考えられる。

いわゆるフィールド教育において、何の問題意識もなく漫然と現場に行っても何も教育的な効果は得られない。エスノグラフィーによる研究では、予断を持たずに参与観察することが重要であるときれるが、それは問題意識や観察の視点を持たないということではない。学生に気づきを生み出すには、現場を観察する視点を与えておく必要があると考える。嵐山での調査も、地元の観光の魅力づくりの工夫を発見するという課題（視点）を与えることによって、初めて学生の気づきを誘発することができたと言える。



図3. 嵐山での観光資源調査（左：竹林の演出、右：嵐山駅における友禅染めを活用した照明）

b) 明智藪の見学と環境会議との交流

次に、嵐山と比較して、福知山にはどのような観光資源があるのか、その資源をどのように扱って

いるのか、という疑問に従って、学生たちを連れ、明智藪の説明会に参加した。この説明会は、環境会議の方々企画し、地元の自治会長のかたに歴史的な経緯などを現地で語ってもらうという企画であり、観光会議の関係者である市民の方々も20名ほど参加された。また、その竹林見学会の前に、環境会議の方々との議論の場を設け、竹林だけでなく環境会議の方々が行っている各種のプロジェクトについて、学生たちの意見を述べてもらった。

明智藪については、もともと地元では蛇ヶ端（じゃがはな）藪と呼ばれており、それは三和の大原神社から見て由良川を龍と見立てたときの龍の頭に相当する場所だから、ということに端を発する命名であるらしいが、明智光秀が明智城を作った際に、由良川の水を利用して堀や水路を作った話や、由良川の洪水被害を防ぐために、自然竹林であった蛇ヶ端藪を活用したことからその後は俗称「明智藪」と呼ばれるようになった話など、歴史的な経緯を学ぶことができた。また、現地での視察では、竹林が多くて生物の棲家や鳥のコロニーになっていることなど、自然保護という観点からも貴重な場所であることなども学んだ。

このような背景を知っている人は、現在は地元の人にも多くはなく、特に現地には何の説明書きもないので、偶然この地を訪れる観光客がいたとしても、当然全理解することはできないのが現状である。そこで、今後何らかのこうした竹林の歴史的背景や意味について説明書きが置かれたり、観光のガイドブックに記載されれば、この竹藪に興味を持つ人も増えていくことが示唆された。すなわち、明智藪は一種の埋もれた地域資産であり、これを発掘・再発見することで、新たな観光資源として蘇る可能性があるということである。



図4. 観光資源としての明智藪調査（左：竹林の実態見学、右：環境会議との交流）

c) 地元伝統工芸和紙の調査と職人との交流

明智藪と同様、地元の和紙文化についても、現在は福知山市の人のうち、十分認識している人は少ないようである。もともと福知山には200軒近い和紙職人が住んでいたそうであり、福知山の大江二俣地域は和紙の一大産地であったという。しかし現在は、むしろ隣の綾部市の黒谷和紙の方が知名度があり、福知山市の二俣和紙は、かなり地元においても忘れさられている傾向がある。実際には、たった一軒で二俣和紙の伝統を守っている地元の5代目和紙職人田中敏弘氏が、福知山市の和紙伝承館

の運営も兼ね、現在福知山の和紙文化の伝承に尽力されている⁽³³⁾。和紙伝承館を学生たちと主に訪問し、田中氏の和紙にける情熱や、二俣和紙の特徴などについて、お話を伺った。

「丹後二俣紙」の品質の高さは、原料の楮の栽培から始めてこだわりの材料を使い、コスト低減のために古紙などを混ぜずに100%楮を使用していることに起因しており、その品質の高さから京都御所へ障子紙として納品されたり、アルメニアの世界遺産で拓本をとるために使われるなど、日本のみならず世界的にも認められているそうである。一般に、パルプから作る西洋紙は酸性であり、木の皮の繊維から作る和紙はアルカリ性であり、今世界中の図書館にある西洋紙の文献はボロボロに傷んできているという大問題があるが、和紙の方は聖徳太子の頃の文献が残っているように千年でも保管がきき、世界的にも和紙文化というものが見直されてきている、という話もある。

この福知山の和紙文化や和紙産業の価値を再度見直し、後世に伝え残していく意義は奥深いものがあると考え。そこで、まず、この和紙文化が地元で継承されていると言う事実そのものを、地元の大人や、次世代である若年層にも伝えて認識してもらうことが大切である。学生たちも、和紙伝承館を訪問し実際に手漉和紙の研修を受けたのは初めてのことであり、こうした体を通して体験する文化の存在にも、学生なりの気づきがあったものと思われる。実際にこのときの学生の感想文にも以下のような記述がある。

- 「これまでも、筆で文字を書くのに、また手紙を書くのに、和紙を多く使ってきましたが、具体的にどういう工程で作られているのかをぼんやりとはわかっていたつもりですが、実勢にお話を聞き、実勢に漉かしていただくことでその1枚が出来上がるまでこれほど大変なのかと驚かされました。」
- 「和紙をエンドユーザーがより一層、いろいろなシーンで使うことで（インテリアや筆記具のみならず）和紙の伝統を受け継ぐ、多くの職人さんたちを減らさずに済むのではと改めて思いました。」



図5. 観光資源としての和紙調査（左：和紙職人田中氏との交流、右：和紙産業の調査）

d) 地元中学でのアンケート調査

明智藪や二俣和紙のどちらも、学生たちの周囲の大人たちに聞いても認知度はたかく

なかった。そこで、10年後20年後の地域を支えるのは、現在十代の若者や子供達であることから、地元の子供達はこうしたものをどの程度認知しているのか、調査することにした。これは、ゼミの学生たちの中の一人が、以前子供達へのアンケート調査をした経験があったことから、興味があるというので、その学生の研究テーマとして設定し、学生主導でアンケート調査を行った。学生と事前に質問事項としてどのようなものを設定するか、時間をかけて話し合った。実際の活動としては、十代の若年世代の意識調査として、京都府福知山市の中学校において、中学生17名にアンケート調査を行った。サンプル数は必ずしも多くないが、これは逆に地域に残っている中学生の絶対数そのものがすでに小さいことによる。アンケートの内容は、

- 1) 将来どのような職種につきたいか？
- 2) 将来どこで働くか？
- 3) 福知山市の自慢のできるものは何か？

といった点を中心に組み立てた。

アンケートの結果、

- 1) 17人中14名が具体的な職業を将来の職種としてあげ、特に臨床心理士とか理学療法士といったかなり詳細な職業イメージを持っているものが多かった。
- 2) 将来福知山市で働くと答えたものは9名で全体の53%にとどまった。これは、詳細な職業イメージに対し具体的に働ける場所が福知山市内には思い浮かばないことによる可能性があり、地域の現実を見据えた上での考えであるように見受けられる。
- 3) 一方、福知山市の自慢できる点について、具体的な自然資産・文化施設・イベント・特産物などを挙げたものは7名で41%であり、郷土への愛着も必ずしも具体的なものを媒介にしていない実態として見ることができた。

以上の結果から、若年世代が将来地元にとどまり地域の産業や社会を支えていくには、

- a) 将来の職場となる産業を地元で確保すること
 - b) 郷土への愛着や郷土意識を醸成するための資源・資産を発掘し意識化すること
- の2点が必要であると結論付けた。

中学生のアンケートでは、17名中8名が、福知山の自慢できることとして「自然」を挙げているが、具体的な内容は書かなかった。様々なものを総称して「自然」といった可能性もあるが、具体的にあげられるところがいくつあるか、という点も重要である。福知山市の中央を流れる由良川のほとりに蛇が端藪（通称明智藪）と呼ばれる竹林があることについてアンケートで尋ねると、17名中知っていると答えたものは1名だけであった。また福知山の二俣和紙については、現在まだ一人の職人が生産しているということについて、知っているものはやはり17名中1名であった。

これらの結果から、福知山の自然資産としての明智藪、そして産業資産・文化資産として

の和紙についても、若年世代はほとんど知らない、そのため自分たちの住んでいる地域のもつ魅力についても認識が弱いし、そのことが将来地域にとどまる動機をより弱いものとしている、ということがわかる。埋もれている地域資産の素晴らしさを再発見し宣伝していくことが、若者の郷土意識の形成と将来の定住化に重要であると考えられた。地元の伝統産業である二俣和紙を使って、地元の自然林である明智藪を飾るというイベントについて、若年世代にただイベントに参加してもらうだけではなく、若年世代にも個性ある町づくりの重要性や、地元の埋もれている自然資源、文化資源の重要性に気づいてもらい、本イベントのような活動を行う意義について理解を深めてもらうため、こうした点を説明する授業を、中学校側の協力のもとに行った。



図6. 地元中学におけるアンケート調査 (左: 中学での授業、右: 中学生への観光資源の説明)

f) 小・中学生への灯籠作り教室の開催

実際に、地元の小学生や中学生を巻き込んで、このイベントに参加してもらうには、別の意味での周知な準備が必要である。それは、子供達でも簡単に短時間で制作でき、しかも予算も必要でない和紙灯籠の具体的な作り方や構成を考えることである。しかも、当然、その作業自体を、子供達が十分楽しめ、あまり失敗することなく、出来栄にも満足できるようなものとして提示する必要がある。

実際には、筆者は、この灯籠の具体的な構造と制作手法の開拓に多くの時間を費やした。できれば学生自身に色々なアイデアを出してもらいたかったが、これは造形に関する知識や経験が絡んでくるので、比較的知識や経験のある筆者自身が中心となって進めた。DIYの専門店なども足繁く通い、様々なタイプの和紙灯籠を試作してみた。当初は、竹という素材を利用したく、竹のヒゴで曲面を構成する灯籠なども考案したが、小学生にも簡単に作れるかという点で、方針転換し、また竹のヒゴの準備や供給という面からも、使い古しの割り箸の活用などを考えるようになった。元となる素材も、なるべく環境保護に結びつく、家庭にある紙の空き箱のリサイクルを考えたが、小学生や中学生に事前に必要な空き箱を確保してもらう時間が取れなかったことから、今回は大学側で全て材料を準備できるものという観点から、安価なギフト用の小箱を大量注文し、子供達に配ることとした。

灯籠の骨格は、こうしたあり合わせの箱や割り箸を利用することで作れるが、そこに単純に和紙を貼るだけでは面白味に欠け、子供たちが飽きてしまう。そこで、和紙に絵を描くとか、木の葉を押し

葉にして貼り付けるとか、いろいろな手法を考えたが、最終的には、手近にある消しゴムを正方形にカットし、彫刻刀で模様をほり、事務用のインクスタンドでハンコのように黒で和紙にスタンプし、スタンプする配置を工夫して和風の図柄を作ることを考えた。消しゴムもインクスタンドも日常で入手しやすく、水彩絵の具などで色をつけるのに比べ作業時間が早く滲みなどの失敗がない。こうしたことから、和紙へのスタンプ遊びを主に据えて、1～2時間程の短時間で、自分の個性にあった和紙灯籠が制作できるような構成とした。また、こうしたスタンプのほか、市販の折り紙や模様のついたギフト用の包装紙を用意し、これを自由に切り抜いて貼り付けることも希望に応じできるようにした。

和紙を使うため、通常のイベントで用いるキャンドルは、火事になる可能性があるので、好ましくない。そこで安全上の観点から、ロウソクのかわりにダイオードを使うことにし、様々な玩具店で探して、最終的には2ヶ100円のロウソク型ダイオードを大量に入手することができた。外形がロウソクのものであり、ダイオードの明かりも暖色でちらつく設計で、小さなローソクそっくりに見えるというものであり、子供達の夢を形にする上で最適と考えられた。

こうして、小・中学生に、1～2時間のワークショップで簡便に制作でき、予算もかからない和紙灯籠の具体的な提示方法が固まった。

しかし実際にこの手法で子供達にワークショップを実施したところ、割り箸を箱にセロテープで張りつける作業に思わぬほど時間をとられてしまい、意外にここで難航した。そこで、2回目からは、この作業工程をあらかじめ行って教材を準備しておき、1～2時間のワークショップでは子供達がスタンプでの模様付けに集中できるように改善した。実際に、子供達はこれらの作業を通して、それぞれが個性的な、まったく異なる模様を考案し、そのヴァリエーションの豊富さと創造性には目を見張るものがあった。こうして子供達個人の創造性を引き出せたことは、この活動が単に地域社会との繋がりを見出すためだけでなく、個人の創造性の発露にも繋がるという側面を認識できたことで重要であり、作業工程の設計がほぼ意図どおりに実現できた証となった。教育の方法論としては、具体的な教材の選択や作業の設計の仕方が結果に大きな影響を持つことが改めて認識され、教育過程の綿密な設計が重要であることを再認識させられた。



図7. 小・中学生への灯籠工作教室（左：灯籠工作の説明、右：生徒たちの作品）

g) イベントの企画と開催

子供達の作った和紙灯籠を竹林の周辺に飾り、夜のイベントとする「竹林と光のプロムナード祭」の開催については、なるべく多くの人を巻き込めるよう、逆に他のイベントと連携し、共催とする方向で企画した。

福知山市では、数年前から、地元の青年会議所（若手実業家・起業家の集まり）が主催して、「三日点火」という夏の夜のイベントを毎年一回開催していた。これは、夏休み前後（2016年は9月17日（土））に、明智城周辺に、3000ヶほどのキャンドル（プラスチックのコップにロウソクを入れたもの）を配置し、同時に明智城の隣にあるゆらのガーデンというレストラン・エリアの広場で、音楽などのイベントを行うというものであった。「三日点火」というイベント名称は、明智光秀が織田信長を倒して三日だけ天下を取ったという「三日天下」という言葉になぞらえたものであるという。青年会議所は、地元の活性化と地域社会の連帯感の醸成のため、こうした活動を続けているのだという。そこで、青年会議所にお願し、「三日点火」のイベントと「竹林と光のプロムナード祭」を同時開催とすることで了承していただいた。

当日は、青年会議所からの提案で、明智城の隣の親水公園で、幾つか机を置いて、通りがかりの子供達に灯籠作りに参加してもらおう企画も入れ、陽が暮れ始める6時ころから、灯籠に灯を灯してイベントを行う手はずとなった。

3時ごろから子供達の和紙灯籠を竹林周辺に並べ始め、6時を待った。

しかし、折からまさに6時ごろ急に大雨が降り出し、雨に和紙灯籠が濡れて壊れるので、急遽イベントを中止し、和紙灯籠の回収にあたった。一部の、防水構造の灯籠だけが、雨の中で光らせることができたが、イベント全体としては失敗におわり、当然ながらイベントの様子を動画で記録することも十分に行うことはできなかった。

したがって、結果的にはイベントは失敗に終わったが、大学生たちは、失敗にめげることもなく、それはそれとして様々な準備の過程を楽しんだようである。来年は、あらかじめ、和紙灯籠に防水スプレーを塗っておくなどのアイデアが、この失敗から生まれたともいえる。



図8. イベントの開催（左：こども工作教室、右：竹林前での大学生との記念写真）

h) イベント開催後の動画制作と発信

和紙灯籠のイベントは完全な形で行うことはできなかったが、準備の過程や一部の飾り位付けを中心に動画で記録したものを編集し、1分程度のプロモーション動画と、10分ほどの記録動画を制作し、下記のアドレスのユーチューブにアップし、大学のHPにリンクを貼った。

<https://youtu.be/93fx1HWj3RA>

<https://youtu.be/8UL2tiXkjNc>



図9. 「竹林と光のプロムナード祭」動画の中の一場面から

(左：ゆらのガーデンと灯籠、右：明智城への道と灯籠)

今後、動画に英語および中国語の字幕を入れ、再度ユーチューブにて発信することにより、この記録を世界中に発信することを考えている。

今回の動画作成は、教員の方で主導して行ったが、できれば次回は、この動画作成についても学生のアイデアを取り入れ、学生主体で行いたいと考えている。その場合も、動画として、どのようなプロット（構成）とするかなどの議論を行うことによる教育的効果も図っていききたい。動画の制作を通じて、本活動の狙いや現象の理解をさらに推し進めることができると考えられるからである。

以上、時系列的に活動の過程をまとめた。これらのステップを通じて、地域そのものにどのような影響を与えることができたのか、また参加した大学生たちの内発的な「気づき」はどうであったのか、次に考えてみたい。

4. 4. 教育実践を通じた学生の「気づき（内発的成長）」についての検証

大学生たちの「気づき」について、彼らの書いたレポートから教育効果について検証する。

いわゆる観光地における地域資源のアピールの仕方や発掘について、前述のように学生達を2016年5月に京都嵐山へ連れて行き、気がついたことを何でもいいから10個以上メモするように指示した。一方同様の調査を、イベント開催後の11月に、兵庫県篠山に対して行った。学生たちの地域資源に対する「気づき」について2回のアンケートを比較すると、イベント前の嵐山調査の際は、ある

程度教員からヒントを与えることで触発されていたが、イベント開催後の篠山調査の際は、教員からヒントを与えなくとも、自発的に10ヶの気づきを書くようになっており、気づきの感性が磨かれていったことをうかがわせた。

*篠山での気づき（学生のメモから一部掲載）

1. 篠山城の中は、展示物とシアターをうまく組み合わせて展示していた。説明がわかりやすい
2. 篠山城の中は、明るく風通しが良く長く見学しても不快な気分にならない
3. 照明器具も凝っていて、美術品を魅力的に演出している
4. 休憩スペースの椅子なども（デザインが）雰囲気を壊していない
5. 篠山城周辺は土色の道路、大正ロマン館周辺は石畳調のタイル、道路と建物に一体感がある
6. 商店街では、店の外に商品を置いて、店員さんも店の外に出ていた
7. 店の人が明るく、元気で生き生きしていた
8. 商店街にBGMが流れている
9. 看板の多さ、（看板が）分かりやすい、黒くシックで落ち着いた色調
10. 子供連れでも楽しめるよう、所々に休める場所がある

一方、プロジェクトに参加した学生たちは、今回のイベントに並行して、それぞれに個別の研究小テーマを持ち、このプロジェクトを生きた事例として捉え、仮説検証過程を持つ卒業研究（レポート作成）を進めた。以下は各学生の研究レポート題名である。

- 地域における観光資源の有効活用：2つの地域の事例比較から
- 観光事業に向けた無形資産発掘：福知山市の事例から
- 観光産業振興のための企業と地域社会との協働のあり方
- 観光事業における戦略理論の有効性：福知山市での検証
- 伝統工芸継承と地域活性化：福知山の和紙文化を中心に
- 地域特産物のマーケティング戦略：福知山市を中心に
- 地域社会の将来像と次世代教育：福知山市での調査をもとに

研究レポートは、それなりに学生たちの気づきにつながる仮説検証過程を含んでおり、例えば、「伝統工芸継承と地域活性化：福知山の和紙文化を中心に」というテーマを選んだ学生は、当初様々な地域の工芸産業がなぜ衰退していくものと継続ないし発展していくものに分かれていくかその原因となるイメージをつかめずにいたが、様々な事例を調査するに従い、消費者側の需要の違い、それに適合するような生産者側の工夫の仕方の違いなどに気づくようになり、伝統工芸を継承していく問題と地域活性化の問題との接点がイメージできるようになっていった。灯籠のイベントに絡んだ様々な行動を積み重ねることと、並行して、個人の研究テーマに沿ってレポートを書き進めることが微妙にリンクし、実践活動での気づきが、研究過程での気づきとオーバーラップしていくような教育効果が

生まれていた。

前記ゼミ学生7人のうち3人の学生は、共著で学会発表を行い、「地域資産の発掘と若年世代の郷土意識の形成-福知山『竹林と光のプロムナード祭』の企画と実践から」と出して日本観光学会第10回全国大会にて報告を行った⁽¹¹⁾。

さらに一人の学生は、大学院に進んで研究者となることを目指すこととなった。この学生は、リソース・ベースド・ビューとポジショニング・ビューという2系統の企業経営の戦略論の枠組みを、地域の観光産業の戦略に適用して、分析を進めた。地域の課題を分析的に見ることを、プロジェクトと並行して研究を進めるなかで学んでいった。

なお、大学生達のレポートから、今回の一連の活動への感想の一部を以下に紹介する。

- 地域の活性化は決して他人ごとではなく、福知山市に住む住民が、自分たちの問題であるという自覚を促すことが必要であるという結論に至った。そこで、地域資源の発信と、福知山市民の地域への愛着を改善するために、若年の世代がこれらの地域資源に触れる機会を設けていくことが地域の発展、郷土意識の確立をしていくために重要であると考えている。観光客が福知山市内を楽しんで散策する様子を見て、自分たちが住んでいる地域の資源を再認識すれば、地域への愛着が復活し、地域活性化や観光地化への取組みが進むのではないだろうか。しかしこれらを検証するためにはまだまだ繰り返し研究を重ねる必要があり、今後も継続して地域資源再発見を名目としたイベントを、福知山市の人々を巻き込んで開催していく必要がある。
- 嵐山という今では世界的に人気のスポットだが、最初は何もなかったところにアイデアを出して今の嵐山があるのだと感じた。やはり大事なのは何事も考え、行動に移すことだと私は感じた。(中略)たくさん準備を進めてきたイベント当日だったが大雨で中止となってしまった。非常に残念だったがこの機会に沢山の地域の方たちとコミュニケーションをとることができたし、今福知山にはどうということが求められているのかもわかった気がした。また、長い間福知山に住んでいたが福知山市にはマスコットキャラがいるなど知らなかったことがまだまだたくさんあるなと思った。イベント自体は成功とはいえないものになったが沢山の地域の人達と協力し合い、自分たちが住んでいる町をよりよくしていく活動は悪くないなと素直に感じる事ができた。まだまだこの企画は1年目であり、来年からも続けてぜひ嵐山のような観光地に福知山がなっていければいいなと思う。(中略)しかし話を聞いているうちに地元の人達は明るく元気だなと感じ、改めていいところだなと感じることができた。田舎にも人との繋がりであったり、自然などたくさんいいことはあると思う。私自身も今回グループワークをしてみて感じたことを同世代に少しでも伝え自分が生まれ育った町をよりよい町にしたいと感じた。(中略)振り返ると非常にいい経験を地元で就職する前にできたなと感じた。地域活性化の魅力や、人との繋がり、アイデアと行動力の大切さを学ぶことができた。これは来年からの就職にも必ず役立ってくると思うし、人として大切なことを学べたことが非常に良かったと思う。

- ゼミでは、大江町の丹後二俣紙を使用した、和紙灯籠を「竹林と光のプロムナード祭」で明智藪にて展示するという取り組みを行ったが、(中略)あまり認知されていない明智藪と福知山城をつなげて観光のルートとすることや、福知山の小中学生と共に、地域資源である丹後二俣紙を使って和紙灯籠を作成したことや、丹後二俣紙自体の製品としての価値や職人の田中さん一家の製作過程やその歴史を売りに「物語性」を持たせた地域資産の発信の方法として有効だったのではないかと考える。(中略)いずれにしても、人々のライフスタイルの変化から、障子紙や書道用紙としての販売が難しいことから、新たなマーケットへの展開は重要であり、またそれが「持続可能性」のある事業であることも大切なポイントであると考え。それにより、和紙という伝統工芸が、「伝統のある新しいもの」として認識され、時代を越えて人々に使われる良い流れが生み出せるのではないだろうか。

こうして学生に一定の成長を促し、自身の思考プロセスをレポートという形にまとめることができたのも、1年間という限られた教育期間の中で、それなりに実践活動のPDCAを回すことができたことが大きい。そのような教育的な意味で、地域の課題を、どのように学生の身の丈にあった形で切り取り、教育過程として組み立てるかという設計は、こうしたPBL教育の方法論として重要な点であると考え。

次に、もうひとつの活動評価指標である、地域の課題解決という側面からの効果検証へと進みたい。

4. 5. 結果として生まれた地域へのインパクトの分析

今回の一連の教育プロセスについて、京都新聞などの地域版で、下記のように学生達の活動が報じられた。

- 7月3日(日)朝刊24面「整備中の明智やぶ見学、福知山環境会議 住民が思い出語る」
- 7月9日(土)朝刊24面「竹林照らす灯籠手作り、9月17日に「光の祭り」福知山公立大 大生ら企画」
- 9月18日(日)朝刊22面「由良川ほとり灯籠を飾る、福知山の小中学生と手づくり、公立大生、光の催し」
- 10月16日(日)朝刊24面「福知山公立大 開学半年、地域の宝と課題へ密着、祭り参加、観光資源発掘・・・、現場で実践 存在感高め」

こうして何回も新聞で取り上げられたのも、新聞のタイトルの作り方を見てもわかるように、本活動が様々な人々との緩い連携を組み、幅広く展開して行ったことが大きく起因している。

直接、連携や協働を行ったのは、丘児童センター(小学生)、上川口小学校(小学生)、金谷小学校(小学生)、川口中学校(中学生)、環境会議(市民)、福知山和紙伝承館(伝統工芸関係者)、福知山青年会議所(地元企業経営者)、福知山市役所(行政)などである。

こうした緩い紐帯による多様な人々とのネットワークが、活動に広がりを与え、結果的に地域社会に与える影響力を増すことになったと考えられる。これを、図10に模式的に示す。

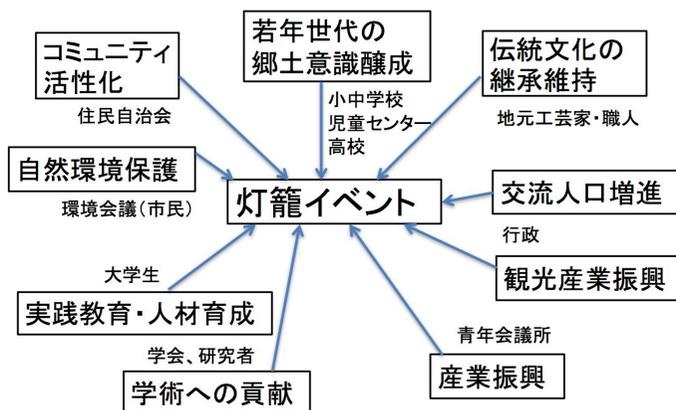


図10. 教育プログラムでの連携体制（大学を中心とした緩い紐帯の形成）

今回の活動が実際に地域に与えた影響の定量的な検証は、残念ながらイベント開催後に予定していたアンケート調査が、イベントの失敗による行うことができなかつたため、十分行う手立てがなくなつてしまった。しかし、途中のプロセスとして、小・中学生への工作教室開催後、小学生から感謝の手紙が寄せられたことを紹介したい。代表的な2例のみ引用する。

- 「この前、とうろうの作り方を教えてくださってありがとうございました。とうろうはとってもきれいな物なんだなあと思つたし、また作りたいたいと思つました。作つたとうろうを9月のイベントに持っていきたいです。本当にありがとうございました。」
- 「この前先生に教えていただいたとうろうは、今でも大切に持っています。また、夜に光をつけてみたいです。そしてキャンプのときに持って行ってみんなで光をつけてみたいです。」

こうした手紙だけでは、まだ活動が若年層の郷土意識にまでどのような影響を及ぼしたか十分にはうかがい知ることができないが、若年層の内面にそれなりに影響を与えたことは定性的に確認できる。

今回、一連の活動には、100人近い小・中学生と大学生が関わり、また環境会議や青年会議所といった地域社会の人々とも連携することができた。環境会議に参加している社会人の方からは、以下のような感想文を得ている。

- 今回のイベントを通して、福知山公立大学の学生の「繋げる力」に非常に興味しました。今回のイベント成功の鍵は、地元の小・中学校を巻き込めたことと伝統工芸やリサイクルなど枠に囚われず様々な分野の要素を盛り込めたことにあると思つています。特に、地元の小・

中学校がブロック単位で参加してくれたことはとても大きなことです。本来であればなかなか自由のきかない小・中学校が、ブロック単位で参加できたことは、大学生に触れ合うことで従来の教育カリキュラムでは学ぶことのできない感性や考え方を学べるではないかという期待が大きな魅力としてあったからだと思います。(中略) また、伝統工芸の二俣和紙を灯籠に活用することや牛乳パックなどのゴミを灯籠の骨格にする案など、様々な分野の要素をどんどん盛り込んだこともイベント成功要因の一つだと感じています。枠に囚われず、様々な分野を軽いフットワークで結び付けイベントを進められたことは、私たちも見習いたいと思います。

今後、活動の広がりや、例えばイベントへの参加者数などで見ていくことも可能だが、一方、活動の効果や、単にイベントへの参加者数のような数字だけで評価しても、一面的な評価になってしまうと考えられる。活動が若年層の内発的な気づきや成長にどのような影響を与えたのか、丁寧な聞き取りや内面的変化にも気を配ったアンケート調査などによって検証していく必要がある。今後若年世代との交流を継続し影響を蓄積し、そうした丁寧な評価と検証によって、少しずつではあるが地域の若年層の郷土意識、地域社会への連帯感に結びついていくことを確認・検証していきたい。

4. 6. 上記実践による教育テーマ設定の妥当性に関する検証と示唆

ここで、一連の活動の総括として、今回のPBLのテーマ設定の妥当性について、考えてみたい。

今回福知山市の課題の一つとして仮に設定した「町づくり」という大きな課題の中で、大学生が1年間の活動でできることは僅かである。今回は、「和紙灯籠を子供達と制作し竹林周辺で飾り夏の夜のイベントを行う」という企画を中心的なテーマに設定し活動の範囲もかなり限定したが、これだけでも、町の魅力づくりに対する気づきの過程、自然竹林資産の発見、伝統工芸和紙の発見、子供達へのアンケート調査と分析、和紙灯籠工作教室の開催、イベントの準備と開催という7つの過程の組み立てが必要であり、さらにこれと並行した個人の研究テーマに対するレポートの作成とそのための調査といった活動が必要であった。またイベント開催後も、一部の学生については、学会発表や論文作成という作業もあり、ひとつの授業科目における大学生の1年間の活動としては、やや盛り込みすぎている面もあり、ようやくこなしただけというものである。各過程については、さらに丁寧に細部にこだわった実施をすることも有効かと考えられ、1年間のテーマ設定としてはむしろ盛り込みすぎであったと反省する。従って、テーマ設定をこれ以上大きくすると、学生の方で消化不良となり、活動の自己評価や反省にうまくつながっていかなかったと推測される。学生の全活動をあらかじめ予測した上で、1年間の学生生活の枠組みの中に活動のPDCAと仮説検証過程が収まるような教育過程の丁寧な設計が重要であると考えられる。

今回、イベントは雨のため中止になったため、前後でのアンケート調査などで、こうしたイベントが人々に与える意識変化などの定量的な効果測定はできなかった。一方、すでに行ったアンケートの対象者数をみても、そもそもすでに地域の若年層の人数自体も少なく、ひとつひとつの集団への活動

の影響力は非常に微力であることも確かである。そうした地域の現状を鑑みれば、最も重要なのは、こうした活動の対象とする団体の数を増やし、幅の広い層の人々への働きかけを展開することであり、そうした多様性を活動自身に盛り込むことも重要なポイントである。

イベントの企画で、観光振興、伝統工芸の継承、自然環境の保護、次世代への郷土意識形成など様々な要素を盛り込んで構成したことが、結果的に連携し巻き込んで行く集団の多様性と数を増やし、緩い紐帯でネットワークを形成できてきたことを考えると、地域協働型 PBL 教育のもう一つのポイントとして、テーマ設定における多様な要素の盛り込みと多様な集団との緩い連携づくりが、地域へのインパクトを生み出す上で重要であることがわかる。同様な示唆は筆者の他の実践例や調査事例からも共通して得られている⁽²⁷⁻³⁰⁾。学生自身の内発的成長のみならず、多様な数多くの集団との関わりの中で、「気づき」の共有、相互の内面的な刺激を深めることが、教育効果を大きくする上で重要な点であると考えられる。我々は大学の教育であるということから、大学生の内発的成長ばかりに気をとられがちだが、実は関わった小学生の感想文にも見られるように、活動を通して大学生が協働した地域社会のメンバーたちも、それぞれにその協働を通して徐々に内発的成長を遂げているのであり、それは教員も同じである。筆者自身が、嵐山や篠山などの観光地での様々な工夫を見て触発されたもの、大学生や小・中学生との交流の中から学んだものも多い。当然、この一連の活動で交流のあった市民や行政の方々も何らかの内的変化を受けたものと推される。言い換えれば、多様なテーマの接点として実践教育のテーマ設定をすることが、結果的に多様な人々の参画や協働につながり、ひいては地域コミュニティを構成する多様な人々の内発的成長を促し、それらの総体として、ソーシャル・キャピタルの蓄積につながる可能性を秘めている、ということではないだろうか。この辺の詳細な調査と分析は今後の課題のひとつである。

先行研究レビューでも述べたように、大学での地域協働型 PBL 教育が盛んになるに従い、地域の側でも、地域の課題そのものを大学生に解決してもらえないのではないか、という期待をもつ傾向も一部にはある。しかしこれは過度な期待であり、そうした方向での連携は挫折感を生み出しかねない。実は、大学生が身の丈の大きさに切り取られた教育課題に取り組み内発的成長を遂げることで、同時にそこで関わった様々な地域コミュニティの人々も、大学生との協働を通じて内発的成長を触発され、ともに内面的な変化・成長を遂げていくことこそが、PBL 教育の醍醐味であり重要な点であると筆者は考える。地域の抱えている課題は、より深く捉えていけば、地域社会内部での様々な意見の違いや軋轢など大学生が短期間には解決など出来ない多くの問題が顕在化する可能性もある。地域の問題は最終的には地域社会そのものが自律的に解決していかない限り外部との交流だけではどうにもならないものを包含している。むしろ、1年間の教育期間の制限内で、一面的とはいえ大学生と関わることでやはり何らかの内発的成長を遂げた地域コミュニティが、その後そうした成長と蓄積を継続させることで、当初の活動の延長線上に、ようやく地域課題そのものの解決に近づく成果が蓄積され検証可能な効果が生まれてくると考えられる。そのような過程を引き起こすきっかけ作りができることが、大学が地域活性化に関わることによる一つのメリットでもある。

現在、どこの地域でも祭での神輿の担ぎ手が不足、「大学生に手伝ってもらえないか」といった話をよく聞く。しかし神輿を担ぐだけでは、大学生の内発的成長を促すことは難しく、根本的な課題解決には結びつかない。祭というものが地域で持つ意味や、担ぎ手がいなくなるメカニズムの分析から始まり、「神輿の担ぎ手が足りない」といった課題をどう多様な人々の接点となるテーマとして設定していくか、そうした教育過程設計の中から、逆に地域社会そのものが成長していく契機を生み出し、大学が真に地域社会に与えるインパクトが生まれてくるものとする。

今回の教育実践から得られる示唆として、PBL 教育は、個人の内発的成長を促すという要素の他に、教員や関係者である地域社会の人々にも内発的成長を促し、共創的な人間関係を作るというネットワーク形成の側面が、その本質を形作っていると理解される。究極的に一つの課題が解決できたかできなかったか、といった評価も必要ではあるが、むしろ、地域協働型の PBL 教育では、大学生のみならず、周辺の関係者自身が活動に関わることで内発的成長をとげていくこと、そしてそれらが協働の中で行われることで、地域のソーシャル・キャピタルが蓄積され、間接的に地域の課題解決力を高めていくという側面が重要であるとする。図 10 を、こうした観点から整理しなおすと、図 11 のようなものとなる。

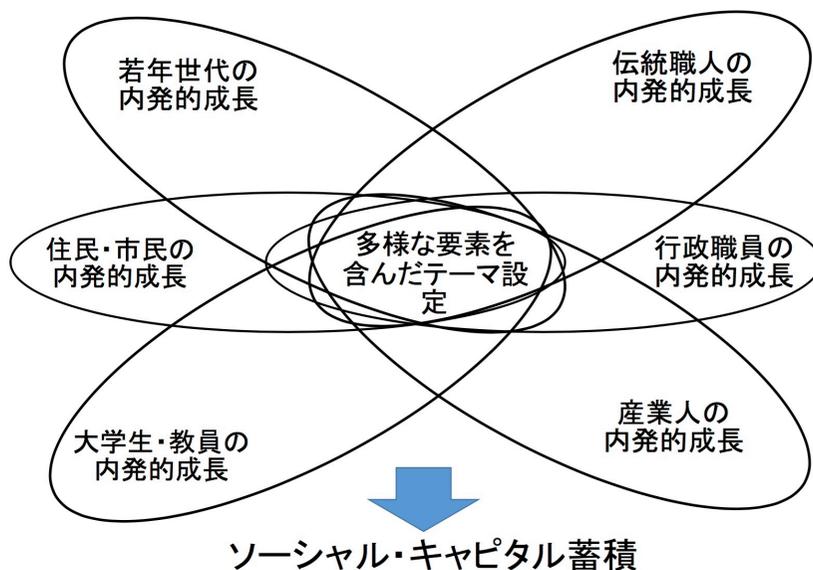


図 11. PBL 教育のテーマ設定と多様なコミュニティとの共創性

4. 7. 今後の検討課題の抽出

一連の活動の総括として、今回の PBL 活動全般について今後に残された課題について考えてみたい。今回の活動では、肝心のイベント自体は、雨のため十分に実施できず、失敗に終わった。そのためにイベントが子供達や地域社会に与えるインパクトの検証という本来の目的も果たせなかった。しか

し教育過程として失敗であったかという点、全く逆で、この活動を積み上げる一つ一つの過程の中で、様々な気づきや効果を検証できた。

若年世代への影響で言えば、和紙灯籠作りで予想以上に参加した小・中学生たちの個性が発揮され、創造性を見ることができた。創造性の発露が子彼等自身にとって嬉しかったであろうことは、小学生たちから寄せられた感謝の手紙に垣間見ることができる。大学生と一緒に活動することの喜びも経験してもらえたと考えると、こうしたことが地域社会とのつながりの第一歩となり、郷土意識の形成に資するものになったのではないかと考える。こうした活動を積み重ね、より大きな影響を次世代に与えていけることを検証していきたい。

一方、大学生自身の気づきとして、初めて嵐山を訪問して従来気をつけて見ていなかった観光のための工夫などに気づきを持ったことは大きい。今後彼らが就職して様々な職種に就くとき、顧客との間性の構築という共通したビジネスのテーマを考えるためのひとつの布石になると考える。イベントの準備と開催を通じて、行動することの喜びを多少なりとも感じてもらえたなら、今後の彼らの人生に資するものになるであろう。

今回の活動には、環境会議や青年会議所など地域の市民や企業家との交流もあった。大学生たちが、次世代を担う小・中学生たちも含め様々な層の人々と交流することが、彼らの人格形成に少しずつ影響を与えていくことも重要である。いわゆる problem-based learning と project-based learning のニュアンスの違いを考えると、project-based learning では、単に学生個々人の「気づき」だけではなく、同じプロジェクトに従事している学生同士の交流、あるいは学生と地域の人々との交流に依存した「気づき」が重要なファクターであり、今後はこうしたファクターの仕掛け方と効果の検証にも力を注いでいきたい。

今後への検討課題としては、実際にイベントそのものを成功させ、その効果を検証していくこと（そのため和紙灯籠に防水スプレーを塗るなど細いディテールの設計）が重要であり、また今回のイベントをより発展させ、

- 1) 他の多くの北京都地域のイベントと連携させる（地理空間的展開）
- 2) より多くの小・中学校、高校などを巻き込んでいく（世代的展開）
- 3) 商店街でのマルシェなど他の地域社会の活動と連携させていくこと（地域社会内での展開）
- 4) 環境会議のより広範囲な環境保全活動とも繋げていくこと（環境保全での展開）
- 5) 和紙のラッピングペーパーなどのコンテストなどを並行して行うことで、和紙の商品化や伝統工芸産業の活性化に多少とも資する活動にする（産業的展開）
- 6) 造形のみならず音楽や演劇、ダンス等より広範なジャンルの活動を包含するアート・フェスティバルとして展開する（文化的展開）

など様々な可能性も追求していく予定である。

また教育上の課題としては、毎年の学生の活動の蓄積を、教員側の教育手法としてだけでなく、どのように年次の異なる学生間で引き継いでいくかということであり、できれば卒業した学生に大学

に訪問してもらう機会を設定し、学生間の引き継ぎや蓄積が起こるような仕組みづくりを設計したい。

「竹林と光のプロムナード祭」というイベントの教育的効果についても、今回は大学としても教員としても初めての教育プログラムの実施であったが、次年度は今回の経験をもとに骨格ができた上での継続実施ができ、今回は行き届かなかった教育の細部についても十分手が届くことが可能となるので、より効果の高い教育手法へと発展させていける可能性がある。従って毎年継続して実施していくことで、その教育的効果はさらに大きなものとなると考える。

また次年度は、イベント活動だけではなく、町の中での活動拠点の形成や、地元商店街などを巻き込んだ定常的な活性化活動へとつなげるなど、新たな要素を盛り込むことを考えている。いずれにせよ、学生の力量もよく見た上で、学生が1年間にそれなりの区切りをつけられ、活動を分析・考察・反省していただくだけの枠組みの中で教育過程を組み立てることが必要である。

最後に、こうした地域協働型PBL教育を、大学全体でどのように構築していくか、と言う観点も重要である。すなわち、地域の主要な課題を洗い出すだけでなく、地域経営全体のバランスの中で、どのような問題にどのような比重を置き、地域全体の課題を大学全体で取り組んでいくか、といった総合的な取り組みである。無論、対象となる地域ごとの属性が大きく関わってくるため、大学のある地域自体の課題解決という側面と、大学で教育を受けた人材が国内ないし世界に飛び立ち、いろいろな属性をもつ地域で活躍していくための教育的な配慮、の両面から検討する必要がある。大学の地域協働型PBL教育の組み立てについては、さらに現実に大学にいる教員の個性や経験、専門性も加味して実現しなければならず、そうした様々な点を配慮した議論を今後も継続していく必要がある。

5. まとめ

本研究では、福知山公立大学で行われた「実践教育」（地域協働型PBL）のひとつの事例を取り上げ、こうした教育が地域に与えるインパクトと、大学生の内発的成長を促すという教育上の効果という2つの側面から、その有効性や問題点を分析した。

今回取り上げた教育事例は、観光にも活力を持ち地元商店街活性化なども関連する「町づくり」というかなり大きな地域の課題解決を中心目標に見据え、これを大学生の1年間の活動の範囲内で構成できるように「身の丈」に切り取りプロジェクトとして構成したものである。具体的には、地元の小・中学生たちと大学生で地元の伝統工芸である和紙を用いた灯籠を制作し、地元の自然竹林である明智藪周辺に灯籠を飾り行う夏の夜の光のイベント「竹林と光のプロムナード祭」というイベントを開催することを通して、以下の諸々の目的を果たそうというものである。

- 1) 地域の若年層に将来の定住に結びつくような郷土意識を形成する。
- 2) 地域の埋もれている伝統工芸や自然資源を再発見し、地域の観光資源として育てていく。
- 3) イベントを通じ、市民、若年層、民間企業、行政、伝統職人、大学生など広範囲の人々の連携意識・連帯感を醸成し、かつ内発的成長を促すことで地域社会のソーシャル・キャピタル形成に資する。

4) プロジェクトを通じ、大学生に地域社会との関わりや観光におけるイノベーションの起こし方を学習してもらい、将来の主体的自律的行動の人材形成に資する。

結果的に、イベントそのものは当日の急な雨のため中途半端な形となって失敗であったが、イベント開催までの教育過程を通じて、上記目標に向けた成果を多少なりとも積み上げることができた。現時点では、その成果は、地元小学生からの感謝の手紙や、大学生の気づきを記したレポート、新聞などで報じられ地域の方々に活動を知っていただいたことなど、定性的かつ断片的な検証の範囲でしか確認していない。今後、さらに活動を継続し、可能であればアンケート調査や評価表などにより種々の活動がもたらす関係者の内面的変化などについて定量的な効果測定なども行うなかで、上記目標に対する教育過程の妥当性・有効性の検証を行っていく予定である。

今回の活動結果の定性的な分析と考察により得られた示唆としては、地域へ与えるインパクトをより多く生み出すためには、多様で広範囲の人々を巻き込み緩い紐帯を形成できるよう、テーマそのものに多面性・複合性をもたせることが重要である、ということが挙げられる。

今後、本報告での活動をベースに、さらに活動と検証を積み重ね、地域協働型 PBL 教育の方法論を進化させていく予定である。

《参考文献》

- (1) 青山公三, 公共政策学の新しい実践教育手法, 地域課題解決型実践教育プログラム「キャップストーン」の試み, 京都市立大学学術報告 (公共政策) Vol. 5, pp. 73-82 (2013)
- (2) 荒川有史, 母国語ノート, 三省堂, (1993)
- (3) 板倉聖宣, 仮説実験授業, 仮説社, (1974)
- (4) 板倉聖宣, 仮説実験授業の ABC, 仮説社, (1977)
- (5) 井上明, PBL 情報教育の学習効果の検証, 情報処理学会研究報告, 2007-IS-99, pp. 123-130 (2007)
- (6) 今井康雄, 教育思想史, 有斐閣アルマ, (2009)
- (7) 乾孝, 伝えたい心理学入門, いかだ社, (1983)
- (8) 乾孝, わたしの中のわたしたち, いかだ社, (1983)
- (9) 奥田靖雄, 国分一太郎, 国語教育の理論, 麥書房 (1964)
- (10) 長田野工業センター, 長田野工業団地の概況, (2016)
- (11) 尾松一喜, 白数知香, 穂満温巳, 平野真, 地域資産の発掘と若年世代の郷土意識の形成-福知山『竹林と光のプロムナード祭』の企画と実践から, 日本観光学会第 110 回全国大会研究発表要旨集, pp. 30-31, (2016)
- (12) 北九州私立大学, 自ら学ぶ大学 (吸収の秘密: 地域課題にホンキで取り組む 4 年間), 九州大学出版会刊, (2015)
- (13) 熊谷孝「言語観・文学観と国語教育」明治図書 (1967)
- (14) 熊谷孝「文体づくりの国語教育—創造と変革への道」三省堂(1970)
- (15) 国分一太郎, 現代教育の探求, 未来社, (1954)

- (16) 駒谷昇一, PBL は教育にどのようなインパクトがあるか, 情報教育シンポジウム, pp.131-138 (2009)
- (17) 澤口隆, PBL 手法を用いたワークショップの実践とプログラミング教育—湘北ラーニング・コモンズの活用, 湘北短期大学 NII-Electronic Library Service, pp.147-162 (2012)
- (18) 高橋英明, 岸浪建史, 工藤一彦, 三上隆, 全学初習・工学部専門教育における創成型教育の試み, 後学教育, Vol.50, No. 3, pp.37-43 (2002)
- (19) 溝上慎一監修, アクティブラーニングシリーズ 1～6, 東信堂, (2016) (特に「2. アクティブラーニングとしての PBL と探究的な学習」)
- (20) 無着成恭, やまびこ学校, 岩波文庫 (1951)
- (21) 無着成恭, 教育ノート, 凡書房 (1959)
- (22) J・Dewey, “The School and Society,” The University of Chicago, (1915) (宮原誠一訳, 学校と社会, 岩波文庫, (1957))
- (23) J・Dewey, “Democracy and Education” The Macmillan Company, (1916) (松野安男訳, 民主主義と教育, 岩波文庫, (1957))
- (24) J・Dewey, “Experience and Education,” The Macmillan Company, (1938) (市村尚久訳, 経験と教育, 講談社学術文庫, (2004)
- (25) 成田龍一, 大正デモクラシー, 岩波新書, (2007)
- (26) 馬場孝, 国際関係学における教育方法と内容の展開 (上): 米学会誌掲載論文サーベイ, 静岡文化芸術大学研究紀要, Vol.9, pp.51-64. (2009)
- (27) 平野真, アートを媒体とした地域共同体の創生—徳島県神山町の事例の示唆するもの, ベンチャー・レビュー No.18, (研究ノート) pp.73-78 (2011)
- (28) 平野真, 横川美貴, アートによる地域活性化—地域に与える多様な影響の考察—, 地域活性研究, Vol.2, pp.67-76 (2011)
- (29) 平野真, アートによる地域活性化～新たな地域経済創出への方法論として, 四国経済連合会 (2011)
- (30) 平野真, アートによる地域活性化—鶴来島プロジェクトに見る自律分散型連携の可能性, 地域活性研究, Vol. 3, pp. 279-288 (2012)
- (31) 福知山市ホームページ, <http://www.city.fukuchiyama.kyoto.jp/> (2016. 10. 3)
- (32) 福知山市, 未来創造 福知山, (2016)
- (33) 増田寛也, 地方消滅, 中公新書, (2014)
- (34) 文部科学省, 大学教育の質的転換に向けた実践ガイドブック, リベルタス・クレオ出版 (2014)
- (35) 和紙伝承館ホームページ, <http://www.city.fukuchiyama.kyoto.jp/life/facilities/entries/000602.html> (2016. 10. 3)